センター通信

外国人日本文化研究者データベース作成プロジェクト『日本研究　外国人研究員名簿　一九八七～二〇一三年度』刊行の楽屋裏

宮崎康子

海外研究交流室に特任助教として着任して以来、外国人日本文化研究者データベース作成プロジェクトに従事しています。その一環として『日本研究　外国人研究員名簿一九八七～二〇一三年度』を二〇一三年度末に刊行しました。

この冊子の目的は、日文研の研究者が海外で研究交流を行う際に、訪問国の日本文化研究者を確認することにあります。したがって、当時の室長（劉建輝教授）と相談して、国籍ではなく、二〇一三年度当時の所属機関の国別に編集しました。専門分野、研究テーマ、最終学歴・学位、日本での学歴・研究歴、日文研在籍期間と研究テーマ、日本語での最新業績二本、所属学会等を掲載しています。現在進行形の研究交流に必要な内容ばかりです。改良の余地も多々あるのですが、冊子形式では初の成果物ということもあって、意外な好評をいただきました。この冊子作成に関わる楽屋裏を少しご紹介したいと思います。

日文研は「国際日本文化研究センター」という名前の通り、世界の日本研究者のための交流拠点です。交流のある研究者は、一九八七年の設立以来かなりの数にのぼります。

作業を始めてまず、全体像を把握することに苦労しました。なにしろ膨大な量のデータがばらばらに残されているので

す。諸データをエクセルにおとすと、外国人だけで一万人を超えており、各人に関する入力項目は一五〇以上ありました。打ち出せば項目だけでA3用紙が横に十枚つながります。これ以外にも、資料の電子化が進む以前のデータは、紙資料のみがA4のドッジファイルやマニラファイルにはさまれて、キャビネットに一部屋分ありました。

プロジェクトには、中国からの留学生で大学院生の栄元さんと、専任の黒住千佳さんという心強い仲間がいるのですが、どこから手をつけていいのやら、何年かかるのだろうと、三人で呆然となりました。

ところで、日文研では外国からの研究者の受け入れに際して、「外国人研究員」と「外来研究員」とに区分しています。前者は給与有で、後者は他の財源によって滞在する研究者です。いずれも当該年度の所属機関が日本以外であれば、日本人であっても外国人であり外来となります。滞在期間は数日から一年間と様々で、お名前も変わって複数回来所される方が少なくありません。来所時の書類をもとに記録を作成するため、現在時での有効性が低く、追跡調査の過程でややこしい事例に出会うことが多々ありました。

個人情報は申告制です。姓名には英語表記とフリガナをつけてもらうのですが、来所の度に微妙に変わる方がいらっしゃるのです。たとえば、「王」さんであれば、「ワン Wang」さんであったり「ウォン Wong」さんであったりと、データ上は違う人物として処理されてしまうことになるわけです。同一人物なのかどうか、慎重を要して人物を特定する作業に数日を要したこともありました。困りはてて、古参の教員に相談してあっさりと同一人物だとわかりました。膨大な記録よりも個人の記憶が有効なことがあるのだと感じた瞬間でした。

別の例だと、アルファベットでも漢字でもない言語が母国語の方も大勢いらっしゃるので、ネット検索がうまくできなかったり、同姓同名で全くの異分野での著名人の経歴がヒットしたりします。退職されていたり、国をまたいで所属先が変更していたりする場合の追跡調査はかなり困難です。和むこともありました。同時期に滞在されていた研究者同士が、帰国後にご結婚されていることを見つけたときは、歓声があがりました。

その他、亡くなられていることがわかれば黙祷し（二〇名）、大きな賞や勲章の受賞者（二九名）や高名な著述家、メディアでおなじみの評論家等が日文研と深く関わっていると知れば、驚き、深く納得もしました。

完成した冊子には、外国人研究員三五八名（四三ヶ国）のデータを収録しました。一万人から随分と小規模になりましたが、彼らは、一年近くを敷地内にある宿舎で生活し、日文研に日勤し、専任教員とつねに一緒に研究を行っています。流暢な日本語はさらに磨かれ、日本人よりも巧みに日本語を駆使し、古文を難なく読み解き、日本文化の神髄を日本人に説くという、まさに国際的な日本文化研究者が熟成されていくのです。冊子作成は、この過程を辿る作業なのです。

現在は、新室長（瀧井一博教授）のもとで事務の大倉礼さんにも手伝ってもらい、更新版『日本研究 外国人研究員名簿』と『日本研究 外来研究員名簿』刊行に向けて、作業を進めています。今年度は外国人・外来研究員合わせて、すでに二〇ヶ国／五〇名以上が来所（予定）です。これは二八名の専任教員の倍近い人数です。

実は、わたしの専門は教育哲学・教育人間学で、このプロジェクトとは一見無関係なのですが、作業の過程で、日本文化の沃野に触れ、日本文化研究に魅せられた人生の悲喜交々を垣間みることができる、遣りがいのある人間学的なプロジェクトであると感じています。

（国際日本文化研究センター特任助教）

年中行事

児嶋　さなえ

仕事納めからあえて考えないようにしていた、年度末までの三ヶ月間にやるべき仕事を頭の中でスクロールして、「できれば来年はもうちょっと気楽に年始を迎えたい…」と思いつつ、四、五年が過ぎてしまった。

私は、研究協力課・研究支援係に所属する「研究支援プロジェクト員」である。

研究支援係の業務は、大きく分けると①日文研・共同研究会に関する業務、②総合研究大学院大学（総研大）に関する業務、③外部資金に関する業務の三つに分類される。

「研究支援プロジェクト員」の主な業務内容は、③外部資金に関する業務であり、外部資金や外部資金的な性格をもつ経費の公募・採択後の各種事務手続き、研究推進方法に関する相談、研究終了時の研究成果報告提出にいたるまでの研究者のお手伝いなどである。文字にしてみるとごく簡単な業務内容なのにどうして毎年、平穏なお正月が迎えられないのだろうかと思うのだが、残念なことに平成二七年の始まりもま